



Title	自然主義対直観主義 -I. A. Richards の一般価値理論の研究(序章)-
Author(s)	内田, 義郎
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1970, 11, p.71-77
Issue Date	1970-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9584">http://hdl.handle.net/10069/9584</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-21T16:56:31Z

# 自然主義対直観主義

—I. A. Richards の一般価値理論の研究（序章）—

内 田 義 郎

## Naturalism versus Intuitionism

—A Study of I. A. Richards's General Theory of Value :  
An Introductory Chapter—

YOSHIRO UCHIDA

その主著『文芸批評の原理』で展開される I. A. Richards の価値理論においては、その根柢的原理として、一般価値理論 (general theory of value) が要請される。Richards は、一般価値理論が要請される理由を説明しようとして、二種類の議論、すなわち、経験的・論理的議論と倫理的議論、を述べている。私は、さきに小論<sup>(1)</sup>を試みて、その経験的・論理的議論の論理的正当性を否定し、その倫理的議論のうちに一般価値理論の要請の真の動機を認めたのであった。一般価値理論を要請する Richards の議論は次のように終わっている（これは、私が〈倫理的〉と呼んだ議論に属する.）。

「批評家に批評家としての資格をえさせるためには、認められた基準を Tolstoy 的な攻撃から守るためには、認められた基準と大衆の好みとのへだたりを狭めるためには、清教徒や倒錯者の粗野な倫理から芸術を守るためには、一つの一般価値理論が作りだされなければならない。すなわち、〈これはよい、あれはわるい〉という〔価値判断の〕命題の意味を曖昧、不定のままに放置しておかないような一つの一般価値理論が作りだされなければならない。それ以外にとるべき道はない。このような一般価値理論は、芸術の本性の探究からの脱線であると思われるかもしれないが、けっしてそうではないのである。というのは、批評にとって一つの十分根拠のある価値理論が必要になると同様に、その価値理論にとっては芸術作品の中で何が起っているかを理解することが必要となるからである。〈善 [=よい] とは何か?〉という問題と、〈芸術とは何か?〉という問題は、たがいに解明の光を投げかけあう。じっさい、そのいずれもが、他方を考えずには十分に答えることのできない問題なのである。さて、これから第一の問題の解決に進むことにしよう。<sup>(2)</sup>」

この要請に応じて、Richards は自己の一般価値理論を提唱する。かくして提唱される Rich-

ards の一般価値理論の検討が、今後の私の課題となるのである。

\*

上に引用した5章の結びからもわかるように、一般価値理論を要請する議論は5章で終わっている。が、Richards は、この要請に対する彼自身の回答をただちに提示するのではない。すなわち、Richards の回答は「一つの心理学的価値理論」(A Psychological Theory of Value) と題する7章で提示されるのであり、5章と7章とのあいだには、「究極観念としての価値」(Value as an Ultimate Idea) と題する6章がはさまれているのである(7章が一般価値理論の本論であり、6章はその序論をなすとみることでもできるであろう)。Richards が要請の5章と回答の7章のあいだに6章をおくという論述のしかたをとったのは、(6章の内容からそう推察されるのであるが)彼が当時の英米倫理学界の風潮を意識していたためであると思われる。

私の関心は、主として、Richards が7章で提示する一般価値理論自体の検討にある。が、その検討にはいるに先立って、Richards の論述の順序にしたがい、一般価値理論の序論である6章を検討することにする(本稿がそれにあたる)。6章の検討は、私の Richards 一般価値理論の研究の文字通り序章にすぎないとはいえ、私のように Richards の一般価値理論自体を検討するという企てが——このような企てはすべて無意味であるというのが、一部の分析哲学者の主張であるが——けっして無意味ではないということをおおむね明示するという点においては、重要である。6章は次ようにはじまっている。

「いろいろな経験を、よい経験とわるい経験に、あるいは、価値ある経験と価値なき経験に分けることのほうが、そのような分類をするとき、いったいわれわれは何をしているのかを知ることよりも、はるかにやさしいことである。この点は、昔も今も変わらない。“何が価値を構成するのか?”、“何がよいと言われるのが正当なのは、どういう理由によるのか、またどういう場合なのか?” 这样的问题に関する見解の歴史を調べてみると、意見は千差万別で帰一するところがない。しかしながら、現在では、この論争は二つの問題にしばられている。その第一は、“価値ある経験と価値なき経験<sup>(3)</sup>の相違は、心理学の用語<sup>(4)</sup>のみで完全に記述できるか?” という問題である。言いかえれば、“両者の相違を記述するためには、心理学の用語のほかに、非心理学的な<倫理的>観念、あるいは<道徳的>観念が必要であるか、それとも必要でないか?” という問題である。その第二は、“かりに<倫理的>観念が必要でないことがわかったとした場合、価値を説明するために必要とされる正確な心理分析とはどういうものであるか?” という問題である。」<sup>(5)</sup>

なお、Richards は経験(experiences)という語に、次のような注をつけている。「注：以下の論述の全体を通じて、<経験>という語は、広い意味で用いられ、心の中で起るあらゆる現象(any occurrence in the mind)を表わすことにする。<経験>は<精神状態、あるいは精神過程>(mental state, or process)と同義である。(以下略)<sup>(6)</sup>」

この書き出しからもわかるように、6章は、G. E. Moore<sup>(7)</sup>の<自然主義的誤謬>(naturalistic fallacy)の議論を意識して書かれているのである(もっとも、Richards は、本文中で

は Moore に言及していないのであるが.)。すなわち, Richards が現在における'価値'についての論争の二つの焦点としてあげている二つの問のうち, 第一の問<価値ある経験と価値なき経験の相違は, 心理学の用語のみで完全に記述できるか?>は, Moore が倫理学の根本問題として問うた問と内容的には同じなのである。そして Moore はこの問に否定をもって答えたのであり, これに肯定で答えることを<自然主義的誤謬>と命名したのである。したがって, Moore にとっては, Richards のあげる第二の問は無意味なのである。しかるに, Richards は, Moore とは反対に, 第一の問に肯定をもって答えるのであり (6章全体は, この点での Moore に対する反論である.), したがって, Richards にとっては, 第二の問が意味をもってくるのである (この第二の問に対する Richards の解答が次の7章となる.)。

私は, Moore の直観主義に対する Richards の反論が完全に成功しているとは思わないのであるが, その議論は, いくつかの点で興味深いので, 検討に値するであろう。Richards の反論は, まず, Moore が<よい (=善) > (good) を単純・分析不可能・定義不可能な非自然的性質であるとしている点に集中する。

「このような見解 [= Moore の直観主義——訳者注] がもっともらしくみえるのは, 主として, 次のような形而上学的仮説によるのである。すなわち, 現実に存在している個物 (particulars) に属する性質が, 何ものの属性としてでもなく, 自存的な存在という意味でも存在している, という形而上学的仮説である。これらの形而上学的存在——<観念>, <概念>, <普遍>など, いろいろな名で呼ばれる——は, 二つの種類に分けられる。感覚的なものと超感覚的なものである。……こういう超感覚的観念のうちに, <よい (=善) > という観念は含まれるとされるのである。」<sup>[8]</sup>

こういう単純・分析不可能・定義不可能・超感覚的な形而上学的存在は, “にせの存在” (bogus entities) であり, “早まった究極観念” (premature ultimates) にすぎない, と Richards は言う。彼によれば, こういう超感覚的な究極観念の存在を主張する立場は, “抽象主義”の奇妙な名残りにすぎないのである。(抽象主義 abstractionism とは, Richards 自身が作りだした用語である。超感覚的な究極観念の存在を主張する立場は, 議事進行妨害作戦 obstructionism とひじょうによく似ているから, この立場をこう命名してもよいであろう, と Richards は言っている.)

「こういう早まった究極観念——美学における<美>, 心理学における<精神>とその<諸機能><sup>[9]</sup>, 生理学における<生命>は, その代表的な例である——を思考にもち込みたいという誘惑は, <抽象的存在>の信奉者には特に強い。このような究極観念に反対すべき理由は, こういうものをもち出せば研究がたちまち行きづまってしまう点にある。価値理論における究極観念<よい>も, まさしく, このような勝手気ままに打たれる終止符にはかならない。」<sup>[10]</sup>

つづいて, Richards は, Moore の有名な<未解決の問>の議論——この議論が<よい>の自然的性質によるあらゆる定義を反証し, 直観主義以外のいかなる<よい>の見解も不可能であることを証明する, と Moore は考えた——の検討にはいる。

「あらゆる自然主義的な<よい>の説明を反証するというこの議論 [= <未解決の

問>の議論——訳者注]は、〈何かがよい〉とわれわれが価値判断しているときのわれわれの意識の状態を直接に内観してみれば、ある結果がえられると主張し、その結果を根拠として利用する議論である。それは次のように主張する。われわれが〈これはよい〉という言明に含まれる〈よい〉の代わりに、〈よい〉についての何らかの説明を代置するとする。たとえば、〈これはよい〉を〈これは欲求されている〉とか、〈これは是認されている〉とか言いかえてみるとする。そうすれば、代置されたものが〈よい〉とは違うこと、あとの判断は前の判断と同一でないこと、がわれわれにわかる、と主張する。この結果は、さらに、次の事実によって確認されると主張される。すなわち、ここで代置する説明をいかに入念なものに仕上げようとも、われわれはつねに、〈欲求されているもの、あるいは是認されているものは、はたしてよいか?〉と問うことができ、しかもこの問は——もし代置された説明がじっさいに〈よい〉の分析になっているならば、この問は正当な意味をもつ問にならないはずであるのに——つねに正当な意味をもつ問になる、という事実である。]<sup>11</sup>

このように、まず〈未解決の問〉の議論を提示したのち、Richards は次のように批判する。

「この〔自然主義に対する〕反論がどの程度の説得力をもつかは、それをうけとる個々の人によってまったくまちまちである。この反論がその根拠としている実験の結果が人によって違うからである。〈よい〉は超感覚的な単純観念であること信じること慣れてしまっている人たちは、どんな代置説明を提示されもて、それをすぐにごまかしだと思ふ。いっぽう、何らかの心理学的価値理論を信じている人たちも、これと同じくらい容易に自分の説明が〈よい〉と同一であると思ふのである。……こういう方法を〈よい〉という観念の意味に適用してみても、それからえられる結論は、こういう方法はこの問題について何の決定もくたすことができない、ということだけであるように思われる。]<sup>12</sup>

結局、Moore があらゆる自然主義的価値理論を論破するに十分であると考えた〈未解決の問〉の議論は、Richards にとっては、“心理学上の仮説を研究に誤用したすばらしい一例を見せてくれる”にすぎず、自然主義的価値理論を反証（もまた証明も）しないということになる。そこで、Richards は、彼の最初の論点、すなわち、超感覚的な究極観念〈よい〉を認めるべきか否かという論点、にもどって、次のように6章を結ぶのである。

「このような究極観念にもとづく理論が横行して、豊かな成果を生むかもしれない分野を研究からしめだすことは、許されてはならない。]<sup>13</sup>

さて、以上の Moore に対する Richards の反論を検討してみよう。その反論は、次のように要約されるであろう（じっさい、Richards は、論理的には、これ以上のことは何も言っていないのである。）。“かりに、Moore が主張するように、超感覚的な究極観念〈価値〉が、すなわち、単純・分析不可能・定義不可能・非自然的な〈価値〉の観念が、存在すると仮定するならば、この前提から、われわれは〈価値〉をただ直観によってしか知ることができず、したがって、〈価値〉に関する研究は——倫理学も、美学も——きわめて不毛に終らざるをえないという結論が出てくる”，と。このように、Richards が、もっぱら、プラグマティックな観念

から、Moore の直観主義を論駁している点、私には興味深く思えるのである。じっさい、上の要約のあとに、“ゆえに、Moore の仮定は真でない”，をつけ加えれば（Richards はつけ加えていないのであるが）、これは、完全なプラグマティズムの真理説となるであろう。

また、Richards は、Moore の〈未解決の問〉の議論を、論理的な問題としてとらえず、実験心理学的な問題としてとらえ、予想される実験結果を根拠として、この議論が自然主義的価値理論を反証するものではないであろうと答えている。これはいかにも実証主義者 Richards らしい答えかたで、やはり興味深く思われるのである。

しかしながら、Moore 自身は、この議論を自然主義的価値理論の論理的な反証とみなしていると考えられるのである。すなわち、Moore は、次のように主張しているのである。〈よい〉をどのように定義してみても、“そのように定義されたものは、はたして〈よい〉か？”と問うことができ、しかも、この問はかならず正当な意味をもつ問になる。もし提出された定義が正しいのなら、この問は正当な意味をもつ問にならないはずである。ゆえに、この定義は正しいはずがない、と。（いま傍点をつけた部分こそ、Moore が彼の〈未解決の問〉の議論のかなめとみなしているところなのである。そして、Richards の批判は、このかなめには全然ふれていない。したがって、Moore は、Richards の批判によって彼の議論が論破されたとは考えないであろう。そのかぎりでは、Richards の批判は不成功に終わっているといえる。しかしながら、あとでわかるように、実は、このかなめこそ、まさにこの議論の弱点をもっともあらわにする点なのである。）もしこの議論が正しければ、これまでに提出されたあらゆる〈よい〉の定義が論理的に反証されるばかりでなく、今後提出されるであろうあらゆる〈よい〉の定義が——自然主義的であろうとなかろうと——論理的に反証されるということになる。したがって、Richards が7章で提出しようとしている“価値の定義”から出発する「心理学的価値理論」があらかじめ反証されるばかりでなく、その価値理論を検討するために時間と労力を割こうとする私の試みも、あらかじめ徒労であることが証明されるという、私自身にとって、重大な帰結が生じるのである。それゆえ、この Moore の議論をもう少し詳しく検討してみることが必要となる。

簡単な例をとって、ある自然主義者が、“Xはよい”は“Xは欲求されている”を意味すると定義した、と仮定してみよう。そのとき、直観主義者は、Moore に従って、“〈Xは欲求されている。だが、Xは、はたしてよいか？〉と問うことができ、しかもこの問は正当な意味をもつ問である”，と主張するであろう。これに対して、自然主義者は、次のように答えることができるはずである。“〈Xはよい〉が〈Xは欲求されている〉を意味すると定義されているのであるから、〈Xは欲求されている。だが、Xは、はたしてよいか？〉は正当な意味をもつ問ではない。それは、1メートルがメートル原器の標線間の距離を意味すると定義されている場合には、〈メートル原器の標線間の距離は、はたして1メートルであるか？〉は正当な意味をもつ問ではないのと、まったく同様である”，と。この答は、〈未解決の問〉の議論の完全な反論になっている、と私は考える。しかし、直観主義者は、いぜん、“この問は正当な意味

をもつ問である”，と主張するかもしれない。その場合には，“この問は正当な意味をもつ問である”，と言うことは，“ $\langle X \text{はよい} \rangle$ は $\langle X \text{は欲求されている} \rangle$ を意味しない”，と言うことと同じであることを，自然主義者は指摘すればいいのである。（同様に，“メートル原器の標線間の距離は，はたして1メートルであるか？”という問も，1メートルはメートル原器の標線間の距離を意味するという定義をすてる立場に立てば，かならず，またそのときにかぎって，正当な意味をもつ問になるであろう。）すなわち，直観主義者は，単に，結論先取の誤謬をおかしているにすぎないのである。

以上の論証によって，私はやすんじて Richards の「心理学的価値理論」の検討にすすむことができることが明らかになった。ただし，この論証は自然主義的価値理論が真であることを証明するものでもなければ，また直観主義的価値理論が偽であることを証明するものでもない。ただ，価値の定義自体に関しては，それが自然主義的であるか非自然主義的であるかにかかわらず，真とか偽とか，正とか誤とかいうことはできないということ，あらためて確認したにすぎないのである。

\*

なんらかの価値の定義を出発点とする価値理論が提示される場合には，それを，現実の（千差万別の）価値体験や価値観念を齊一に説明しようとする理論と解釈するべきではないであろう。それは，現実の価値観念を新しい価値観念によっておきかえようとする提案であり，またそうすることによって行動の様式を変化させようとする提案である（このことは，「この本が未来の選択に役立って欲しい<sup>(4)</sup>」と述べている Richards の場合には，明示されているのであるが），と解釈されるべきであろう。したがって，そのような価値理論を対象とする批評的研究とは，提案された価値の定義自体を証明しようとしたり，反証しようとしたりすることではないであろう。それは，第一には，自己の先入見をできうるかぎりすててその定義を受け入れ，その定義を出発点として構築される価値理論の論理的整合性を検討することであり，第二には，その価値理論に従って個人が，あるいは社会が行動するようになったと仮定して，その場合にどのような結果が現実に生ずるであろうか，をできうるかぎり予測してみることはないかと思う。次稿で私は第一の仕事にとりかかる予定である。

## 注

- (1) 「一般価値理論の要請」（長崎大学教養部紀要 人文科学 第10巻 1969）
- (2) I. A. Richards, *Principles of Literary Criticism*, Chapter V. (以下，これを R. P. (V) と略記)
- (3) “価値ある経験” (experiences which are valuable) と “価値なき経験” (experiences which are not valuable) は，原語でも日本語でも，次の二通りの意味に解されうる。(1) 価値的経験と没価値的経験。(2) 価値の大きな経験と価値の小さな，あるいは負の価値をもつ経験。原文のコンテキストから判断して，Richards は(2)の意味で用いていることは明らかである。
- (4) 実は，ここで，心理学の用語としてどれだけを認めるかが重要であろう。すなわち，いわゆる媒

介変数を認めるか？もし認めるとすれば、どれだけを——“欲求”，“衝動”，“動機”，“態度”，“習慣”，“人格”などの全部を，あるいはそのうちのどれとどれを——認めるか？さらに，媒介変数というものをどうみるかが重要であろう。媒介変数は，単に説明の便宜上導入されたものにすぎないか？（＝結局は，観察できるものについてのカテゴリで定義される。）それとも実際に存在しているものに対応するか？（＝心理学のカテゴリとしての地位を認める。）など，が重要であろう。これらの点に関する Richards の見解はあまり明確に述べられていない。ただ，Richards が媒介変数のうち，“衝動”，“欲求”，“態度”を実際に用いているのは事実である。が，それらをどうみているかについては，明確な説明はあたえられていない。

- (5) R. P. (VI).
- (6) この定義はあとで（とくに7章で）重要になるので注意。
- (7) 以下の論述には G. E. Moore, *Principia Ethica*, Chapter I を参照されたい。
- (8) R. P. (VI).
- (9) Richards は〈諸機能〉で Kant のいう三機能——“認識の機能”，“快・不快の感情の機能”，“意欲の機能”を意味していると思われる。cf. R. P. (II).
- (10) R. P. (VI).
- (11) R. P. (VI).
- (12) R. P. (VI).
- (13) R. P. (VI).
- (14) R. P., ‘Preface.’

（昭和45年9月30日受理）